SPARC Japanセミナー 2024「オープンアクセス義務化の先にあるもの：来るべき世界に向けて」
2025.1.30

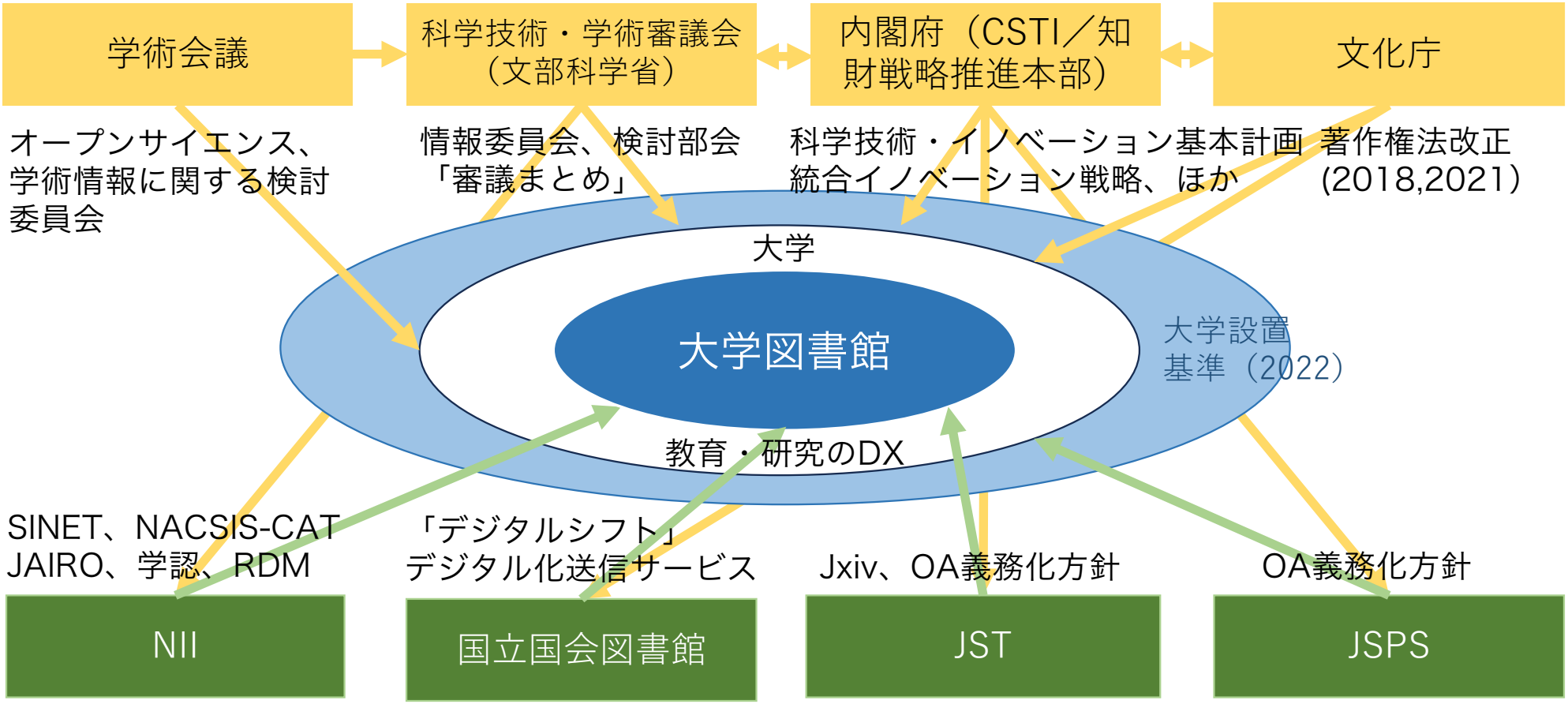
オープンアクセス義務化後の大学図書館の姿としての「2030デジタル・ライブラリー」

竹内　比呂也
千葉大学副学長（教育改革，学修支援），附属図書館長
アカデミック・リンク・センター長，国際未来教育基幹 高等教育センター長
大学院人文科学研究院教授

Always Aim Higher

CHIBA UNIVERSITY

オープンサイエンス／大学図書館をめぐる政策的俯瞰図



「デジタル・ライブラリー」の実現

- デジタル・ライブラリーとは，1990年代に盛んに議論された「電子図書館」構想を更に進めたものであり，コンテンツのデジタル化を経た結果として意識される，運営やサービス，職員の知識やスキルの変革などを内包する形で自身のDXを推進する大学図書館のことをさす
- 大学図書館の本質を具現化する，そのあるべき姿として2030年度を目途に実現するものと位置付ける

ロードマップの優先事項

【1】支援機能・サービス：支援・サービスの基盤としての「コンテンツのデジタル化」と「オープンアクセス」

これまでのコンテンツとこれから生み出されるコンテンツの効果的な利活用に向けたデジタル化とオープン化を促進すること

【2】場：「ライブラリー・スキーマ」に基づく機能の具体化

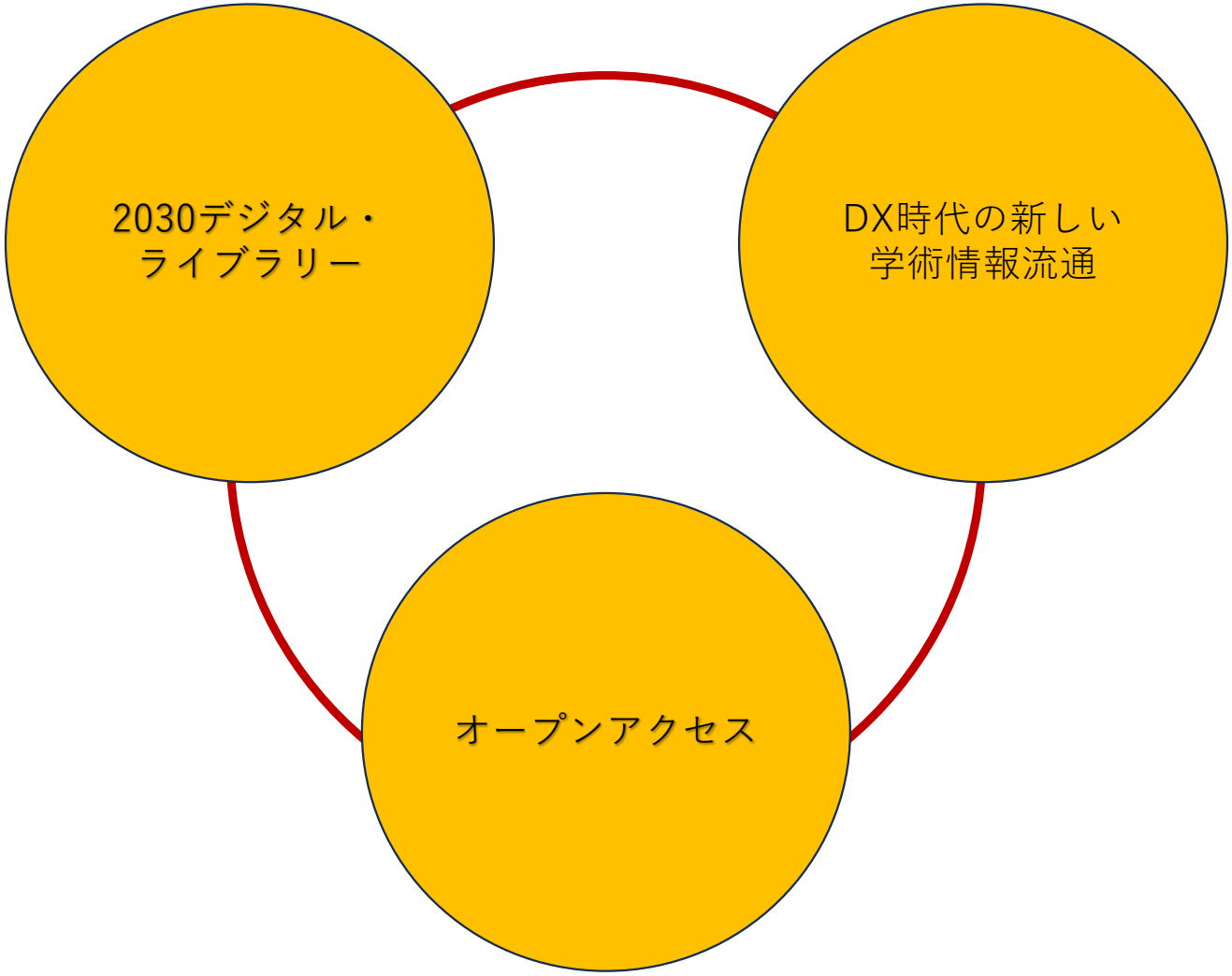
大学図書館の論理構造としての「ライブラリー・スキーマ」の明確化とそれに基づく大学図書館機能を具体化し実装すること

【3】人材：求められる「スキル・育成」とそのための「制度」

オープンサイエンスに係る支援等、今後求められる新しい機能に対応しうる人材の育成と、育成された人材の適切な配置を実現すること

今後の大学図書館に求められる教育・研究支援機能や新たなサービスについて

- 「デジタル・ライブラリー」の基礎としてのコンテンツのデジタル化とオープンアクセス
  - ✓資料のタイプ別に，「過去」と「これから」を分けて，どのようにデジタル・コレクション化していくかを検討する必要がある
  - ✓「これから」については，研究データ（研究支援の文脈），教材（著作権，教育学修支援の文脈）に対応。利用者の立場に立つこと。
  - ✓また「これから」については「オープンアクセス」「オープンデータ」が原則
  - ✓研究データのオープン化に関する大学図書館の役割は，公開されている研究データの発見可能性を高めること
  - ✓専門書等の電子書籍化が遅れている領域では，商業流通に馴染まないものを中心に大学図書館がデジタル化，オープン化を担ってもいい


2030デジタル・
ライブラリー
DX時代の新しい
学術情報流通
オープンアクセス